

つぎ じょうざんばく
 築地梁山泊



明治二年（一八六九）十一月五日、栄一は旧江戸城西丸に上がり、太政官の弁官から民部省租税正に任ずるという宣言を受けます。租税正は民部省内の一組織である租税司の長で、現在でいえば財務省主税局長のような立場に当たります。全く思いもかけない成り行きです。栄一は、早速その足で民部省へ出向き、辞令が発令されたことを報告します。何とも心細いことに、誰一人として顔見知りはいませんでした。

当時の民部省は大蔵省と合併した形になっており、民部卿兼大蔵卿の伊達宗城（旧宇和島藩主）をはじめ、大輔の大隈重信（旧佐賀藩士）、少輔の伊藤博文（旧長州藩士）、大丞の井上馨（旧長州藩士）、少丞の郷純造（旧幕臣）など、



▲大隈重信（国立国会図書館ウェブサイトから転載）

いずれも民部・大蔵両省兼務で仕事をしていました。とりわけ大隈と伊藤の両人は、新政府の中でも急進的な改革派として知られていました。栄一は、何日か民部省に出仕しますが、このまま新政府の役人として仕えて行く気にはどうしてもなれませんでした。栄一は、辞意を固め、築地にあつた大隈邸を訪ねます。

大隈邸は、元旗本三千石の大身戸川氏の屋敷で、敷地だけでも五千坪あつたという広大なものでした。大隈はこの大邸宅を開放し、伊藤や井上をはじめ若手の官僚たちや書生連が数多く出入りし、「築地梁山泊」の異名をもって呼ばれていました。酒を酌み交わしながらの談論風発、ワイワイガヤガヤの中で、新政府の施策の一つ一つが決まつて行く。そんな場面も想像されます。

大隈は座談・演説の名手として知られ、大隈を訪ねた栄一を得意の弁舌で説得してしまいました。大隈いわく、「今は国家草創の大事な時である、いわば八百万の神々による新しい国づくりの最中なのである、君もその八百万の神々の一柱としてこの大きな仕事のために是非骨を折ってもらいたい」。大隈と栄一との長い付き合いの始まりです。（文：新井慎一）

物語の手引き

【民部省】
 明治2年7月8日に設置された中央官庁の1つで、土木・駅通・鉱山・通商など民政関係の事務を取り扱っていました。同年8月11日には徴税（民部省）と財政（大蔵省）機構の一体化による中央集権体制の確立を目指し、大蔵省と合併されます。

【大隈重信】（1838 - 1922）
 明治・大正時代の政治家。肥前藩士（佐賀）の出身で、幕末の尊王攘夷運動に加わり、明治新政府では大久保利通・伊藤博文らに協力して、政府の基礎をつくりました。帝国議会の開設後は議会政治で活躍。第8・17代内閣総理大臣を務めます。東京専門学校（早稲田大学）の創立者としても知られています。

※本コーナーの全編を通じて、登場する人物については、歴史上の人物としてその敬称を略します。また、年齢については、当時の通例に従い数え年の表記とします。

キラリ 熱・中・時・間

～川本重忠節踊り同好会～



▲大澤喜代子さん（指導員・初代会長）

重忠公の雄姿を伝える

武蔵武士の鑑とたたえられる川本重忠。その生誕の地である川本地区で、重忠節踊りの伝道師として活躍しているのが、川本重忠節踊り同好会です。毎年4月に開催される重忠まつりをはじめ、市内外のイベントで踊りを披露するほか、地域の子どもから大人まで、幅広く指導に当たっています。11月3日祝日には、川本地区で開催される川本重忠顕彰事業の一環として、同会により重忠公の墓前に重忠節踊りが奉納されます。

重忠節踊りの特徴は、『大きな石を投げる』『愛馬を背負い、急な山坂を下りる』といった重忠の武勇を思わせる振り付けが多く含まれていること。扇を使った舞台踊りと、大勢が輪になって踊る輪踊りの2種類があり、特に舞台踊りは重忠の一生を表現しています。

「日本舞踊の要素が入っていて、流れるような動作がきれいです。」
 そう話すのは、会の創設者でもあり、現在も指導員を務める大澤喜代子さん。



▲輪踊りの様子（重忠まつり）
 着物は青地に白で『かわも』の文字がデザインされています

喜代子さん。昭和52年に県が重忠節踊りを制作した際、振り付けをした三喜八千代氏から直接習った数少ない指導員の1人です。「郷土芸能として根付かせたい」と会を立ち上げたのは平成2年。一時は会員数250人を誇り、重忠節踊りは一気に川本地区全体に広まりました。

会の次なる目標は、市内全域で踊られるようにすること。

「キビキビとした武士の姿を表現し、正しい踊りを伝えていきたい」。その思いを込めた所作の一つ一つが、重忠の雄姿を今日に映し出します。

情熱 農力



▲栗原 正行さん（42歳・武蔵野）

風景を 磨き続ける

全国屈指の花き生産地域であり、造園業が盛んな花園。栗原さんは、庭のデザイン・施工から剪定・除草などの管理まで一切をこなす『庭のスペシャリスト』です。植木を取り扱う上でのこだわりは、先を見越して木の良さを生かすこと。「庭は造って終わりではなく、長く付き合っていくものです。適当にはできません。信頼される仕事を続けることが大切です。」その手は、数十年、数百年先も残る美しい風景を磨き続けます。

ありがとうの手紙



優秀賞
 中学生の部
 Aくんへ



深谷中学校3年（現高校1年）神部貴史さん
 僕が転校して初めて学校に行った日。初めての場所で、知っている友達が誰もいなくて、友達ができるかどうか、とても不安でした。

僕は話がうまくないし、人に話しかけるのも苦手だから、だまっていて暗いんだと思われたらいやだなあと感じていました。でも、気軽に話しかけてくれた友達がいたから、緊張がとけて、次第にクラスに慣れていくことができました。

話しかけてくれてありがとう。これからも学校の事を色々、教えてください。